

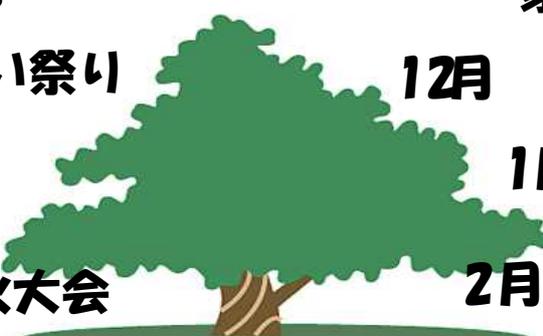
七つ森

第5号



平成12年10月1日に緩和ケアセンターとして開棟し、まる2年が経ちました。「七つ森」第5号では、平成14年10月26日（土）に行われた家族会をとりあげ、参加者の感想などをスナップ写真と共にご紹介します。

緩和ケアセンター年間行事

- | | |
|-----------|------------|
| 4月 お花見 | 10月 芋煮会 |
| 5月 節句 | 家族会 |
| 6月 あじさい祭り | 12月 クリスマス会 |
| 7月 七夕 | 1月 新春お茶会 |
| 8月 花火大会 | 2月 節分、豆まき |
| 9月 お月見 | 3月 お雛祭り |
- 

ご家族からのお言葉 ほか

『淋しがりやだった主人のために、忙しい時間をさいて話して下さったボランティアの方々、お風呂好きだった主人を寝たままお風呂に入れて下さった看護婦さんに、家族の者がどんなに助けられたことか。お部屋（病室）も本当にきれいで静かで、窓から見える夜景が悲しい程美しかった。主人と二人で見ながら“仙台の街もこんなにきれいなんだ”と初めて気が付きました。』

『亡くなる一週間前頃から主人は“家に帰りたい”と言い出しましたが、それまでの間、特に息子たちはゆったりとしたスペースの中で、これまでにない位の父親との対話ができ、今後の生き方を学んだようです。本当に素晴らしい看護と設備を与えていただきありがとうございました。』



今年4月から緩和ケアセンターに配置換となり、初めて家族会に参加しましたが、思い思いを語られるご家族の皆様の表情が、涙をいっぱいにして、時には笑顔を見せ、またお看取りの後の悲しみと寂しさを懸命に乗り越えようとしておられる心情が、ひしひしと伝わって参りました。家族会に参加することで、お互いの癒しと励みを感じとられ、当センターでの思い出も懐かしさとして語られたことと思います。私たち医療者への感謝の言葉と向上のための良い評価も頂き、今後の励みとなりました。

さて、当センターで勤務して思うことは、終末期看護において、医療者は心豊かであればならないということ、そして何より、ボランティアの方々の素晴らしいご活躍で支えられているということです（敬服致しております）。家族会は、当緩和ケアセンターの発展にとって不可欠であり、この会を通して、ますます慈しみのある質の高い緩和ケアセンターにしていきたいと思っています。

緩和ケアセンター看護副師長 F.O.

『妻は健康体で通してきた57年間、病気など考えたことがないということで、ショックは大きいものがありました。最後、緩和ケアセンター入所で、家族とともに臨終を迎えたこと、20日間夜の付添いのできたこと、痛みや苦しみもなく静かに子供、孫など家族に見送られたこと、幸せだったと思います。』



『18年間いっしょに暮らした人を41才で離れることになりました。最後の4ヶ月、17階で過ごしました。久しぶりに17階からのながめをみましたが、主人は毎日どんな想いで窓を見ていたのでしょうか。今は車で17階を見上げています。』



家族会にて

今日は、ありがとうございます。心の中で挨拶をさせて頂きました。

緩和ケアセンターで働いていると、優しい言葉をかけて頂くことが少し多いかもしれないかなと思うことがあります。それは、労いや同情、嬉しい疑問、そして誉めてもらうことや感謝して頂くことであったりします。今日の家族会では、そういう言葉を沢山頂きました。

優しくしてもらおうと嬉しくなって、特別なことをしているように思ってしまうこともあります。でも、違うのですね。手術、検査、診察、そして最後のわずかな時間を共に悩む、そのような医師の仕事のほんの一部を行っているだけなのです。今、自分がここにいるのが一番良いと思うようになったから、私はここにいるのだと思います。それでも、亡くなっていく方々の波に飲み込まれ、少し自分が見えなくなる時や迷ってしまう時もあります。この病棟では、どうしても寂しくなることが多いのです。だから、言葉をもらって「そんなことは」と思いつつも、嬉しくなったエネルギーを分けてもらって、それでいいかなとも思います。

今日は、ありがとうございます。力をもらって、少しずつ歩んでみます。そして少しでも私たちが、皆様の力になれていたなら、こんなに嬉しいことはありません。

緩和ケアセンター医師 A.S.



☆ボランティアさんより

どんなに苦しい時にも私の挨拶に笑顔で応えてくれる人。

夕方の配膳にお邪魔した時、「遅くまで頑張っているね、ありがとう」と言ってくれる人。

いつも綺麗にお化粧をしている人。

ボランティアの入れるコーヒーを楽しみにしてくれる人。

他の患者さんの目標になりたい」と言う人。

夕焼けを家族で楽しむ人・・・。

私の印象に残っている表情は全て日常生活の中にあります。ほんのちょっとの言葉が、

ほんのちょっとの気持ちが、人に与えるものが如何に大きいかを教えてもらっています。

そしてそのほんのちょっとのことを緩和ケアという場でできる人間の強さ、深さ。それは

簡単なことではなく、日々の積み重ねの上に初めてあるものなのだと思います。私も日々

丁寧に生きたい。それがここで与えられた大きな目標です。

緩和ケアセンターボランティア K. T.



編集後記

早いもので緩和ケアセンターがオープンしてから2年が過ぎました。無我夢中の2年間でしたが、東北大学医学部附属病院の緩和ケア病棟として、根が確実に張りつつあります。生きることの大切さ、苦しさ、素晴らしさ、そして緩和ケアの難しさ。患者様・ご家族の皆様からどれだけ多くのことを教えられたことでしょうか。

今回は遺族ケアとしての家族会の様子を中心に編集しました。「七つ森」は年1回発行の手作りの機関紙ですが、緩和ケアセンターの情報誌としてさらに充実したものにしたいと考えています。

(S. I.)